

グリム・メールヒェンにおける「秩序」の構図

日大生産工 ○竹内季子

1 はじめに

『子どもと家庭のメールヒェン集』(Kinder- und Hausmärchen: 以下 KHM と略記)の文体は、今や「グリムのジャンル」(Gattung Grimm)として認められ、類似の印刷物を評価する際の基準となっている。グリム・メールヒェンのジャンルとしての特徴は簡単には得られないが、KHM のなかの魔法メールヒェンについて言えば、従来のジャンルの定義が当てはまるであろう。

本発表では、「グリムのジャンル」とよばれるまでに形が整えられた KHM の 1857 年版(決定版)から「秩序正しい」(regelmäßig)様式を探し出して KHM の特徴について考察する。

2 ルンゲの 2 篇のメールヒェン

1805 年、ルンゲ(Phillip Otto Runge, 1777–1810)は、アルニム(Achim von Arnim)とブレンターノ(Clemens von Brentano)の『少年の魔法の角笛』第 1 巻のお礼として、ハイデルベルクの出版者ツィンマーに低地ドイツ語の話 2 篇「ねずの木の話」(Von dem Machandelboom)と「漁師とその妻」(Von dem Fischer un syner Fru)を送った。1808 年、「ねずの木の話」の方をアルニムは自分の発行する『隠者通信』に発表した。グリム兄弟は 2 篇とも KHM の 1812 年版(初版第 1 巻)に 19 番と 47 番として収め、1857 年版(第 7 版)までほとんど手を加えなかった。

グリム兄弟は、芸術作品として高い評価を得たルンゲの 2 篇の再話作品に彼らの理想とするメールヒェンのイメージを見出し、ルンゲを手本として他のメールヒェンに手を入れることによって「グリムのジャンル」を形成したのである。

3 理想的な語り手フィーメニン

KHM 初版の第 1 巻にはハッセンプフルーク(Hassenpflug)家の姉妹、ヴィルト(Wild)家とマンネル(Friederike Mannel)、クラウゼ(Johann Friedrich Krause)、その他がメールヒェン提供

者として貢献しており、有名なメールヒェンのほとんどが集まっている。

KHM 初版の第 2 巻に語り手として大きく貢献したのは、まずフィーメニン(Dorothea Viehmann, Viehmännin 1755–1815)の名前が挙げられ、その他ハクストハウゼン(Haxthausen)家の姉妹、ジーベルト(Ferdinand Siebert)、ドロステ・ヒュルスホッフ(Droste=Hülshoff)家の女性たちであった。

グリム兄弟は、初版第 2 巻の序文のなかで、フィーメニンを理想的な語り手として、彼女はこれらの古い話をしっかり記憶に留めていて、彼女は思慮深く、確実に、非常に生き生きと、みずから話を楽しみながら語り、初めはまったく自由に、それから望めば、もう一度ゆっくり語ってくれるので、すこし練習すると書き取ることができるほどであったとたたえている。

またグリム兄弟は、フィーメニンの肖像画を弟のルートヴィヒに描かせて、第 2 版第 2 巻の口絵を飾ったほどであり、話の提供者のなかでフィーメニンを特別扱いしている。

フィーメニンがいかに完璧な語り手であったかは、KHM 第 2 巻「鵞鳥番の娘」(Die Gänsemagd KHM 89)において、1819 年版は娘がストーブに告白する部分以外、細かいことを除いて 1815 年版と同文であり、1857 年版に至るまで変更されていないことから伺える。

4 公式化した様式

(1) 初版と第 2 版(1819 年版)との比較

KHM 15 初版では兄弟は魔女の家に苦労の末、到達するのに対し、帰り道を容易に見つけている。そこで第 2 版では道程のバランスから、帰路にも障害となる大きな川を置いたのである。

KHM 21 初版では口を利く白い鳩二羽だけが窓から飛び込んできて、灰かぶりが豆を選び分けるのを手伝い、助言を与える。第 2 版では灰かぶりを手伝う鳥をふやし、家鳩二羽の他に山

鳩、青空の下の鳥がみんな群れをなして入ってくる。また結末部分では、教会への行き帰りに二羽の鳩が灰かぶりの肩の左右にとまり、付き添いの姉二人の目だまをつつきだしてしまう部分も書き加えられているが、ここでは左右を有効に使っている。

KHM 28 第2版では、三人兄弟から二人兄弟へ変更され、猪を倒しに森へ入るのに違う方向から森へ入るようにとの王様の言葉に従い、弟は東から、兄は西から入っていく部分が書き加えられている。

KHM 52 1810年版と比較すると、初版ではお客たちの整列は、侯爵が追加され、決定版では更に子爵が追加となり、王様がた、公爵、侯爵、伯爵、子爵、男爵、貴族たちの順番によって完全無欠となる。

KHM 53 第2版では、鳥たちは大きさ順に、すなわち先ず最初にふくろう、その次に鴉、最後に鳩がやって来て、白雪姫のために泣く部分が書き加えられている。

(2) 秩序正しさ

[左右] KHM 21 63 90 97 107 111
172 178

[両側] KHM 4 19 33 83 121

[前後] KHM 90 127

[上下] KHM 192

[東西] KHM 28 60 63

[東西南北] KHM 88

[列] KHM 52 86 119 180

[大→小] KHM 50 53 60 (169)

[順番] KHM 61 193

[対照] KHM 9 57 87 93 126 135
136 161

[分割] 2分割 KHM 4 101 180

3分割 KHM 2 6 81 180

[日・月・星] KHM 25 186 193 (88)

5 おわりに

KHMの第2版から文体の手入を任されたグリム兄弟の弟ヴィルヘルムは、ルンゲの様式的にも完成されたメルヒェンやフィーマニンから聞き書きした完璧なメルヒェンをめざして決定版まで形を整えていった。完全に形を整えたメルヒェンとは、口伝のメルヒェンの特徴である、繰り返し、特定の数、色、素材への偏向また韻文導入などがあるが、それらは公式化されている。忠実な繰り返しや厳格な順番保持に規則

正しさをがある。ヴィルヘルムは対照、均衡、完全を常に考えながら3部構成や漸層法などの技法を使って、メルヒェンの細部においても全体においても均整のとれた構造を作り上げていった。ヴィルヘルムにとって完全なメルヒェンとは秩序正しい形を有するものであり、そこには対称性も感じ取ることができる。詳細については発表時に資料を配付して説明を加える。

参考文献

- 1) Heinz Rölleke, Die Märchen der Brüder Grimm, Artemis Verlag, München ; Zürich, (1985), pp. 70-85
- 2) 小澤俊夫訳, ヤーコブ・グリム ヴィルヘルム・グリム メルヒェン集エーレンベルク稿, (ドイツ・ロマン派全集第15巻『グリム兄弟』所収), 国書刊行会, 第15巻, (1989)
- 3) 吉原高志・吉原素子訳, 初版グリム童話集, 白水社, 全4巻, (1997)
- 4) グリム兄弟編・小澤俊夫訳, 完訳グリム童話一子どもと家庭のメルヒェン集一, ぎょうせい, 全2巻, (1996)
- 5) 金田鬼一訳, 完訳グリム童話集, 岩波書店, 全5巻(改版), (1996)
- 6) ハインツ・レレケ著・小澤俊夫訳, グリム兄弟のメルヒェン, 岩波書店, (1990), pp. 122-151
- 7) 小澤俊夫, 素顔の白雪姫ーグリム童話の成り立ちをさぐるー, 光村図書, (1985), pp.260-265
- 8) 高橋健二, グリム兄弟, 新潮社, (1968), pp.98-120
- 9) マックス・リュティ著 小澤俊夫訳, ヨーロッパの昔話, 岩崎美術社, (1972), pp.42-144
- 10) Max Lüthi, Das europäische Volksmärchen, Form und Wesen, Dritte Aufl. Francke Verlag, (1968), pp. 25-75